

第46回 吉田拓郎が仕掛けた アイドル実名ソングの波及効果

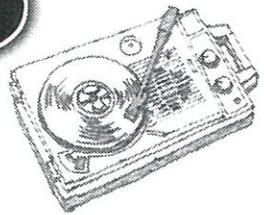
その昔、長瀬剛がアイドル時代の石野真子との関係を噂されていた頃のこと、長瀬がライブ会場でヒット曲の『順子』を歌う際に「オー、順子」と呼びかけるところを「オー、真子」と歌い、会場から喝采されていたことがありました。名前を変えた瞬間、私の脳裏には石野真子の画像が浮かび、違う歌になってしまいました(笑)。

タイトルに女性名を冠した歌といえば、順子以外にも、愛ちゃん、霧子、江梨子、志津子、チコちゃん、ケメ子、おゆき、安奈、亜紀子、葉マリアンヌ等々、東京で見られる星の数以上ありますが、現役アイドルに捧げられ、実名(愛称)がタイトルになった作品といえば、長瀬の師匠筋にあたる吉田拓郎(当時は平仮名表記)がかまやつひろしと歌った『シンシア』に尽きます(昭和49年7月発売)。

「南沙織」が南ファン以外の人にも印象付けられました。これも、人気の絶頂にあった拓郎節とシンシアの

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎
絵・松本浦



人柄のおかげでしょう。その波及効果は単なるアイドルとフォークのファンの結合に留まらず、拓郎主導の和製フォークの世界が接近していきます。レコード会社専属制度がGS時代に崩壊しフリーの作詞作曲家が進出した世界に、フォーク系アーティスト合流のきっかけを作ったのが拓郎でした。

私の手元に『月刊明星』の同年8月号の歌本(付録)がありますが、巻頭カラーには筒美作品が8曲、「最新オール・ヒット・フォーク」と称されたモノクロページの冒頭には拓郎の写真と共に『シンシア』が譜面付きの新曲として大きく掲載されて

いて、当時の筒美の浸透度と拓郎の人氣がわかります。

拓郎は『シンシア』発売の年の1月に森進一に『襟裳岬』(詞・岡本おさみ、曲・吉田拓郎)を提供、同年のレコード大賞を受賞するほどの大ヒットとなり、歌謡ポップス系の大ヒットと共に、すでに当時の歌謡界を牽引する一人となっていました。

『シンシア』発売の1年半前、南沙織は6枚目のシングルとして『早春の港』(曲・筒美京平)をリリース、主旋律が2つしかない覚えやすい佳曲ですが、「心のふるさと」を失ってしまった男性に対し、2人が出逢ったこの街で「あなたのおふるさと」になりたい、と心の中で明るく訴えるラブソングになっています。

南の大ファンでもあった拓郎が、この歌に感動、アンサーソングとして創作したのが『シンシア』だとされていますが、故郷らしき地方都市に帰った男の挫折感を描きつつ、結局はシンシアの母性愛にすがろうとしている男の弱さを吐露した構図のように思えます。

同年、すでに拓郎節は小柳ルミ子、浅田美代子らのアイドルが歌い始めていました。

ほりい・るくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私の「昭和歌謡考」第4集』(あわせになるうね) (クスコー出版) が好評発売中